

G4 用例改訂日記



中邑光男

〇〇年△月×日：Get ready, get set...

『ジーニアス英和辞典 第4版』(G4)の編集会議。過去最大の改訂を施すという方針のもと、用例も全面見直し、大幅書き換えをすることに決まる。そのメイン担当は私だ。

「用例は辞書の命」とも言われる。心して取り組もうと思います。

〇〇年△月×日：G4C

1億語の米語から成るコーパス、G4C(orpus)がついに完成した。これは私がG4の用例のために独力で開発したものだ。

コーパスでは1億語から成るBNC(=British National Corpus)が有名だ。しかし、同規模の米語コーパスはまだ存在しない(American National Corpusは開発中)。米語が日本の英語教育の中で占める重要性を考えれば、米語コーパスはどうしてもほしい。そう考え、作り始めた。

作成上の方針は次の通りだ。

- (1) 1億語の米語から構成する。
- (2) 2000年以降にアメリカで発行された新聞・雑誌、放送された番組の英語から作成する。
- (3) 一般のアメリカ人が見聞きするテレビ番組やUSA Todayなどの比較的平易な英語を重点的に収集する。

完成には編集委員、編集部も喜んでくれた。G4編集作業において、G4Cは重要な情報源になるだろう。特に発信の点から重要な語彙について、コロケーションを特定化するのに力を発揮す

る。一例を挙げれば、見出し語 notion では次の情報を提供することが可能だ。

The middle-aged tend to *have preconceived* ~s about young people.

中高年者は若者に先入観を抱きがちである。

このように、G4CのおかげでG4のコロケーション情報がさらに充実する。G4Cの生みの親としては嬉しい限りです。

〇〇年△月×日：Two sides of a coin

コーパスを使ったコロケーションデータの収集作業が本格化している。G4CとBNCの調査結果には興味が尽きない。発見の連続だ。

しかしG4編集に携わる私たちに共通している考えは、「コーパスへの過度の期待は禁物」ということだ。「コーパス時代」の今だからこそ、これは肝に銘じておかなければならない。説明しよう。

そもそも1億語や2億語のコーパスでは、用例改訂の仕事には小さすぎる。そこに見つからない表現だからといって軽く見ることは危ない。G4C、BNCは基本的には「高頻度の単語の『定番』コロケーション」を調べるためのものということが私たちの方針だ。

コーパスに見つからない表現についてもう少し言えば、そんな表現は英語にはいくらでもある。ペーパーバックの小説でも、ちょっと複雑な状況・人間関係を描写する場面になると、語彙が難しくなったり、文構造が複雑になったりする。卑近な例を挙げれば、試験問題文も「ふつうの英

語」だけということはない。「ふつうの英語」だけを勉強しても、「本物の英語」には歯が立たない。従って、私はG4の用例には、BNCやG4Cにない表現があってもよいと考えている。

まずはネイティブスピーカー(NS)による徹底的なチェック。それとコーパスを組み合わせ、相補わせることによって、用例改訂作業を進めます。

〇〇年△月×日：My dream team

用例改訂チームの初会合が開かれた。集まったのは、日本人とNSの執筆者。次のような点を考慮してメンバーを選んだ。

まず、日本人執筆者について。彼らに求められる力は、高い英語運用能力、幅広い英語学・語法の知識、豊富な教育経験など幅広い。

中でもNSと仕事をする際にリーダーシップを発揮できるかという点は重要だ。G4は日本人英語学習者のための辞書。NSの多種多様なコメントのどれを採用するかは、日本人英語学習者のニーズを熟知している私たちが判断しなければならない。この点、英語教育現場に精通されている山田正義先生と岡本真由美先生が参加して下さることは、本当に心強い。

一方、NS執筆者の人選には少々苦労した。私が設定した条件は、(1)辞書作りに情熱があること、(2)勤勉であること、(3)日本語力のあること、(4)英語力のあることだ。(1)と(2)は当然としても、では、どうして(3)と(4)なのか。

(3)を加えたのは、日本語と格闘したことのないNSが、G4の利用者に共感を覚えるはずがないからだ。コーパス、電子辞書が全盛の現代だが、辞書は人が作るもの。執筆者の気持ちや態度は、辞書からにじみ出る。

(4)については、米国留学中に恩師がおっしゃったことばを思い出す。「英語の質問は、読書量の豊富なNSにすること。NSなら誰でもいいわけではない。君は多くのNSよりも英書を読んでいるのだから、とりわけ注意するんだよ。」

今日出席した、アメリカ人、イギリス人、カナダ人、オーストラリア人から成る執筆者チームを見れば、恩師も安心してくださるだろう。

会議では執筆者に大まかな用例改訂の方針を伝えた。次はその一部。

- (1) 原則として、用例は発信型英語にも役立つ情報だと考える。読んで分かればよい語彙・語義には必ずしも用例を与えなくてもよい。
- (2) NSが「意味は分かるが、今まで見たことのない英語」と指摘する用例は改訂する。
- (3) コーパスにおいて高頻度の表現を積極的に掲載する。ただし日本人にとって有用な英語は、頻度が低くても、用例に含めることがある。
- (4) 「仕事で使える英語」の用例を増やす。生徒たちが社会人になっても使える辞書を目指す。

今日は、用例改訂の「ドリームチーム」が発足した日。嬉しい記念日です。

〇〇年△月×日：Go the distance.

leaveという見出し語に次の用例がある。

I left my umbrella in [on] the bus yesterday.
きのうかさをバスの中に置き忘れた。

多くの英語教員は、「話者が『バスの中』と意識している場合はinを使い、そうでない場合はonを使う」と説明するだろう。しかしこの説明で本当に大丈夫だろうか？

ネイティブスピーカーから戻ってきた原稿を見る。修正のないもの、inを削除しているもの、反対にinがふつうと書いているものがある。このように意見が割れると、自信がなくなる。原稿に書かれたカナダ人の意見を引用しよう。

I would say that we travel “on the bus” but “I left my umbrella in(side) the bus” refers

more specifically to the location of the umbrella. However, I believe people would probably say, “I left my umbrella on the bus.”

「自分は in を選ぶが、他人は on を選ぶかもしれない」というところが気になる。

そこで詳しい説明を求めて、米人執筆者に会いに行った。彼は言う。「忘れ物をした直後は『バスの中』のどこに忘れたのだろうと考え、in the bus と言うね。しかし自宅に戻って家族から、「また傘忘れたの。会社で？コンビニで？バスで？」などと聞かれると「バスの中」のどこという意識が薄くなり、他ではなく「バスで」という意識が強くなる。その時は on the bus を選んだ。」

やっと分かった。用例を次のように変更する。

I left my umbrella on [in] the bus yesterday.
きのうかさをバスに[の中に]置き忘れた。

このような前置詞の提示順や日本語の細かい使い分けにも注意を払っていることを、逐一文字面から読み取ってもらえるわけではないだろう。が、こうしたことの累積が全体として辞書に与える影響は小さくないはずだ。妥協してはいけません。

〇〇年△月×日：SWIM

英語をある程度勉強すれば、NS が指摘したことに意味付けすることは可能であろう。ところが NS が指摘することを予想し、間違いを未然に防ぐことは困難だ。

自分の英語力よりも下のレベルの問題点はよくわかる。しかし、少しでも上の問題点は、見当すらつかない。私はこの現象を SWIM（指摘されるとわかるが、言われないと全くわからない）と呼ぶ。

見出し語 congratulation の、

I offer you my ~s on your success in the entrance examination.

入試合格のお祝いを申し上げます。

という用例の検討中、この SWIM を経験した。

G4 に掲載する用例は全て NS が目を通すのが決まり。この決まりを厳密に実行するためだけに NS に見てもらった……はずだった。

ところがこの文を米人が次のように修正したのだ。I offer you my ~s on your success **on** the entrance examination.

どうして success on なんだ。success in ...で「…における成功」という意味のはずだ。NS の不注意に違いない。そう考え彼に再確認したところ、次の返事が届いた。

To me, it is far more common to say “success on an exam” than say “success in an exam”, because the paper is physical. But if the speaker is thinking of the exam NOT as a paper, but as the ACT of testing, then they’d say IN.

これでもまだ納得がいかない。そこで、別の米人に意見を求めた。彼も同じ見解だった。

A doctor’s physical examination or a performance based test might be “in” but for a paper test, “on” is more common.

NS が success on を提案したとき、私には in や on の前置詞本来の意味が思い浮かばなかった。機械的に success in と覚えたからだ。SWIM の典型的な例だ。

I offer you my ~s on your success on [in] the entrance examination.入試合格のお祝いを申し上げます。《◆ on は試験用紙、in は受験という行為に焦点を当てた言い方》

と書いて、今日の仕事は終了。

明日も NS を質問攻めにとしましょう。

(なかむら みつお・関西大学教授)